

たぐみ

CraftsmanShip

特集 愛好家所蔵内外古民藝展示会

第47号

小林多喜二の『蟹工船』 初版本のこと

先日、学生時代からの親しい友人の家を別の友と連れだつて訪ねた。久しぶりの顔合わせと、同窓による問題意識の共通点が話をはずませ、麦酒の杯を傾けながら時の経つのを忘れる三時間を過ごした。この家のあるじは近世史の専門家であるが、十数年ほど前に家を新築した際、膨大な蔵書や史料を納める書庫を地下に作ったという話で、前々から拝見したいと思っていた。だがその友も病を得て、しかし幸いにもこれらの書籍の多くを喜んで引き取ってくれる教育機関があるとのこと。で明るい顔をされていた。

人にもよるが文学にせよ歴史書にせよ、読み流すのではなく、自らの体験にあわせて想像し、思索し、自己の内において再構成するということがある。これがなによりも読書の醍醐味だと私は思う。インターネットで活字を

読むという作業が、いかほどの悦びと教養を人にもたらすか疑問に思わざるを得ない。

話が佳境に入り、公共放送に永く勤めたもう一人の友が、実は最近古書市で手に入れた本だがこれはめつたにない珍しい本なんだ。と一冊の本を取り出した。「小林多喜二の蟹工船の初版本だね。普通よくある初版本はどれも最終ページが破られていてね。ところがこれは最後のページの一部、つまり活字の印刷部分をおおむね残して斜めにきれいに破つてあるんだ。おそらく関係者それも出版社の誰かが内密に保存し、永年にわたつて隠しもつていたのではないだろうか。」

いくらで買ったのか聞くと、なんと二十八万円だという。

その日、家に帰ってから手元の「小林多喜二作品集」の年譜(手塚英孝編)を参照すると、「蟹工船」の初版出版は一九二九年九月二十五日で、今から八十年前のことである。(十二頁に続く)

たくみ企画展 愛好家所蔵内外古民藝展示会

会期 三月二十七日(土)～四月五日(月)

三月二十八日(日)、四月四日(日)は営業いたしません。

会場 銀座たくみ二階ギャラリー

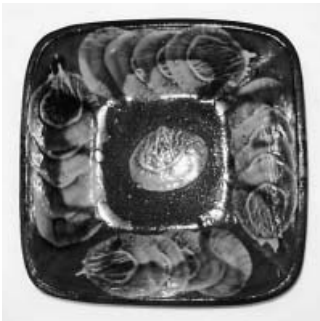
営業時間 十一時から十九時まで(日祝日・最終日は十七時半迄)

たくみ創業から今年は七十七年目となります。人間でいえば喜寿をむかえた訳ですが、その間、数多くの民藝の工人や工藝作家の品々を扱い、お客様にお届けしてまいりました。

そして今、永年の愛好家の方たちから、愛玩の品々を再びお預かりして、新しい、若いお客様にお頒けする時代となりました。美しい佳き品々は、そうして甦り、生活の中に生かされていくのだと思います。ご高覧いただきたく存じます。



しのぎ文灰釉壺(朝鮮)



刷毛打文角鉢(佐久間藤太郎)

■出品品目

日本・海外新古民芸品

陶 朝鮮古陶器、古伊

万里、古唐津ほか、
内外古民藝陶器

木 古家具、李朝筆筒、
墨壺ほか

雑 古民具、籠類、
錠前、鉄湯釜、

雑誌工藝、美術本、
図録ほか

作家作品

濱田庄司、バーナード・
リーチ、芹沢銈介、棟
方志功、金城次郎、船
木研児、水野半次郎、
岡村吉右衛門、佐久間
藤太郎、成井藤夫ほか



墨壺



古作竹籠



油壺、小壺いろいろ (古伊万里)



黒釉瓶 (朝鮮)



厨子 (李朝)



鉄絵瓶 (李朝)



二彩松絵中壺(武雄唐津)



染付水滴二種(李朝)



鉄絵徳利(朝鮮)と染付瓶(同)



油壺(伊万里)と魚文水滴(李朝)



魚文抱瓶(金城次郎)



染付香炉二種(古伊万里)



三彩湯呑(金城次郎)



小壺二種(古伊万里)



板絵「ここに椅子あり」(芹沢銈介)



板絵「大願成就」(芹沢銈介)



板画(棟方志功)

雑誌工藝



限定本板画集(棟方志功)



型絵染絵本(岡村吉右衛門)

本は文明のともし火(その三)

—文化の担い手としての本の役割—

志賀 紀子

◇ソ連の出版社で仕事をすると

外国の出版社の現場で仕事をすると、いうチャンスはめつたにないことだが、私は一九八四年のチュルネンコ政権の時代から、一九八七年のゴルバチヨフ時代まで三回に分けて仕事をしてきた。

ソ連の企業はすべて国営だったが、モスクワにあったプログレス社は、世界五十ヶ国語の翻訳セレクトションを持ち、各国語の活字をその国から買入れて翻訳・印刷し、輸出していた。内容は主に政治・経済・文学・芸術などの書籍であった。

ローマ字のアルファベット二十六文字、もしくは三十数文字前後の表音文字からなる言語の場合は良い。しかし

日本語のように、表意文字である漢字を数千字も有し、その上、音節文字としてもカタカナ、ひらがなまでも持つ言語の場合は、そう簡単にはいかない。

出版されていた本は、字間が空いて左右にブレているし、逆に行間が詰まっていて、版づらいっぱい組んであるから、何とも読みにくい。そこでプログレス社はナウカを通じて、活字を扱えるブック・デザイナーを派遣してほしいと要請してきた。当時の日本はすでに写植が主流であったから、私が行くことになった。

ソ連での、仕事を通じての交流は、実に有意義なものだった。それらについてここでは触れないが、行間や余白のとり方などはすぐアドバイスできた。欧文の小文字は f g h などのよう

に、上のアセンダライン、下のデセンダラインまでつき出している文字があるため、それほど行間をとらなくても空いて見える。だが日本文字は一字一字が同じ正方形に納められているから、字詰によって行間をたっぷりとないと読みにくいのである。

その他の問題点については、日本に帰ってから、活字を輸出した会社を訪ねてみて次のようなことが解った。

当時各国で使われていた活字には、大きく分けて二つのタイプがあった。一つはヨーロッパ系のデイドポイント制であり、もう一つはアメリカ・イギリスのバイカポイント制である。日本ではアメリカ式のバイカポイントを使い、一方ソ連はデイド方式を使用していた。

デイドとバイカではIポイントの大きさが微妙に違い、デイドの方がわずかに大きいのである。仮に9ポのバイカ活字を、デイドの鑄造機でそのまま鑄造してしまえば一字一字は左右



志賀紀子『子供は地球の未来を担う』
ソ連プログレス社で出版され、
日本ナウカ社が輸入販売した。

この取材を通じて私が痛切に感じたのは、政治体制がどんなに変わろうと、それぞれの民族が持つ歴史の重みと、それを伝承しようとする

民族の願いは深い。地球上に真の平和が到来しなければこれはなし得ないだろう、ということだった。
たとえばアルメニアは、ローマより早く世界で最初にキリスト教を国教とした国だが、十九世紀末から二度にわたって、トルコによる民族絶滅の大虐殺を受けている。そしてこの国のイコ
「敵が攻めてきたときに、布ならばすぐに丸めて持ち出すことができま
す。そして古代からの貴重な歴史を後世に伝えてくれるのは書物なのです。
アルメニア人にとって、本は自分の命よりも大切なものなのです。」という
彼らのひたむきな言葉は、私の心に深く刻まれた。彼らは「マテナダラン」という書物の殿堂を聖地とし、今なお世界各地から貴重な古文書収集し続けている。
さてもうひとつ忘れられないのは、ロシア・アヴァンギャルドとの出会いである。

にブレておどつてしまふ。また漢字と仮名では字画の密度が違うので、これも関係する。これを直すには中心のラインを揃え、更にそこにかかる高さの圧を、こまめに微調整する必要がある。これらの問題は、文書にして後から送った。その後送られてきた本は、字間のブレも少なく、程よく行間も空き、版づらのゆとりもあつて読みやすくなつていた。役に立てたのだったら嬉しい。
帰国後、プログレス社の社長から「自分の目でありのままのソ連を取材し、

一冊の本を書きませんか。」との提案があつた。
取材、執筆、撮影、デザインのすべてを自分でやり、一冊の本にまとめるということとは、めつたにあるチャンスではないから、これは喜んで引き受け
た。
テーマを「ソ連の中等教育に於ける美の問題とは何か」にしばらく、アルメニア、グルジア、ロシアを四十日間にわたつて取材した。この本は『子供は地球の未来を担う』という書名でソ連で出版され、日本のナウカ社が輸入をして発売した。

この取材を通じて私が痛切に感じたのは、政治体制がどんなに変わろうと、それぞれの民族が持つ歴史の重みと、それを伝承しようとする

私は一九五〇年末頃に、日本で始めてこれに触れた阿部公正先生の授業を、桑沢デザイン研究所で受けていたから、ロシア・アヴァンギャルドについては、ものすごく興味を持っていた。だがその頃は、日本で実物を目にする機会ほとんどなかった。おそらく一九八二年の「芸術と革命展Ⅰ」が最初であろう。

ソ連で仕事をしていた頃、一人のデザイナーから一冊のカタログを贈られた。「ステンベルグ兄弟作品展」とある。

この兄弟については、二〇〇一年に「アヴァンギャルド展」として日本でも公開されたが、一九八四年のソ連でこのような展覧会が開かれているとは、思いもよらなかつたから、私は感激してしまった。またこのカタログのデザインが、何ともおしやれで素晴らしいのである。ロシア・アヴァンギャルドについて触れる紙数はないので、ここでは省略するが、その後もいくつかの秀れた展覧会が開かれている。

二〇世紀の初頭に始まり、後にアヴァンギャルドと総称されるこれらの運動は、それまでの芸術の範疇を越えた幅ひろい視点から物をとらえ、展開している。

飛行機、自動車などの交通機関の発達、電話・ラジオ等の通信技術、映画・印刷などの視覚伝達の進歩を巧みに生かして、問題提起を試みている。これは現在我々が直面している、コンピュータとデジタル化の問題と相通するものであろう。

◇人が生きるということ

最近の健康ブームにはすさまじいものがあり、テレビはもちろんのこと、雑誌その他の出版物も溢れている。私が医学の仕事に関わるようになったのは、一九七〇年末頃であった。

講談社の『医科学大事典』全五〇巻を始めとし、ほかに数冊の医学書を手がけた。医科学大事典は、大きなプロジェクトの一員として参加したが、こ

れは医師向けの専門書であった。他の本はナース向けの『ナースが視る人体』や一般向けの『からだの地図帳』等の地図帳シリーズである(以上いずれも講談社刊)。こちらは企画から一個人として参加した。

この三つのシリーズでは、視点のおき方と図版展開のやり方が全く違う。医師向けの専門書は局所的であるが、事典としては最新の情報も図視しなければならぬ。ナース向けは人体の機能と、それがうまく働かない人のケアに目が向けられる。一般向けはどこにどんな臓器があつて、どんな役割を果たしているのか、ということから入る必要がある。

それまでの家庭医学書のように、こんな症状があるからこんな病気だろうとパネル式にたどっていくのではなく、人間の身体のしくみと働きを正しく理解することが、何より大事なのである。

医学に関しては全くの素人だった私

は、解剖書を開いて一から勉強を始めたが、それでも人間の身体を理解するにはほど遠かった。図版指導をしてくださった解剖の先生方や外科の先生は、これは実物を見るのが一番だと、実際に解剖をしたり、摘出したものを見せてくださった。

それまで概念的にとらえていた人体の構造と働きを目の前にして、ああこれはこういうことだったのかと、目を開かれる思いがした。生命ある人体の精緻な営み、そして死してなお多くを語りかけてくる人体の尊さを目の前にして、人が生き、そして死ぬという自然の尊さを、身を持って体験する思いだった。

下図起こしが完成し、執筆の先生のOKが出る、あとはイラストレーターにバトンタッチする。だがそれからも何度となく修正を加え、「まだ違和感があるなあ」という先生のおぼやきがなくなるまで、描き直すことも多々あった。だが、私はこの医学の仕

事を通じて、実に多くのことを学んだ。二一世紀に入って医学は急速な進歩をとげた。特に今まで不明な点が多いとされた脳の研究は、日進月歩といつてよい。先日、テレビである映像を見た。

手を動かす神経に損傷がおきて両手が動かなくなつた人に、脳に直接電極を埋めて別な回路から命令を下し、両手の働きを回復した、というものである。

これはたしかに素晴らしい。だが、同じ映像の中でロボットの出てくる場面があった。同じ原理でロボットの脳にある意図をもつた脳を埋め込めば、ロボットがミサイルのスイッチを押してくれる、というものである。これは大変恐ろしいことである。

インターネットが普及し、映像その他のデジタル化が急速に進んだことで、人間は大量の情報を入手できるようになった。だが人間がその情報を単に活用すればよい、というものではな

い。その情報を踏まえた上で、宇宙と地球、そして自然と人間が、より良く共存するにはどうすればよいか、という問題になってくる。また、情報を活用しアレンジすることで、新しい造形が生まれてくる、というものでもない。これは二一世紀に課せられたテーマでもあるだろう。

私は今、東京を引き払って山梨に住んでいる。豊かな自然の中で、富士山を目の前にしながら仕事をしていると、自然の営みにはすべて意味があり、理に適ったことなのだとつくづく実感するのである。

(完)

しがのりこ／東京都生れ。自由学園、桑沢デザイン研究所卒。一九六一年より図書設計家として本の内容と深く関わった仕事を手がける。志賀エディトリアルデザイン主宰。

著書「子供は地球の未来を担う」
【モスクワ・プログレス出版所刊】

寄縁

近藤 京嗣

先日、たくみの志賀さんから、「たくみ」誌が送られてきた。内容が新鮮であり待たれる小冊であるが、今回はたくみに竹の電気シェードなどを納めていた故青木隆介さんから寄託されたという、柳宗悦先生の図面が書かれた



奥右から水差(古丹波)、茶碗(島岡達三)
手前は竹炉縁。筆者の茶室より

葉書がのつていた。昭和三〇年に開かれた民藝館茶会で使う、湯を汲む柄杓をもっと強いものにしたということと、丹波の水指の蓋の摘みに藤を巻いて、もつ所を太くしてしつかりしたものにしたいと、作り手の青木さんに依頼した図面がのつていた。

私もこの柳の図面は初めて見たが、その図面による実物は見ているし、前もって使ってもみたが使いにくく、会では結局使わなかった。しかし柳先生は、茶会に使う道具に対する創作力には心を打たれた。

「たくみ」誌の九頁の、柳の青木宛の葉書に、水指の蓋の摘みが小さくて貧弱なので、藤の中は少し細目が良いと思いますという文と、摘みに藤を巻いた絵まで描いてある。

何とその水指の蓋は、私が柳先生にすすめられて初めて持った古丹波の水指のものであり、その寄縁に驚いた。何れにしても志賀さんの紹介した青木さん宛の柳先生の葉書は、民藝館茶会

の資料として新発見のものである。

また志賀さんによれば、柄杓について、従来の風炉の柄杓の合が竹の表皮を削り、内皮だけで作られているのを、柳が青木さんに皮つきで作らせ、何回作っても翌月には乾燥して割れてしまい一つか二つしか残らなかったという。今の市販の品が表皮をむいた芯だけの作りであることの理由がよくわかったと青木翁が述べていた。とも書いてある。柳先生による民藝館茶会に関心のある方は、「たくみ」(四十三号)をお読みになることをおすすめしたい。

私の古丹波の水指の、蓋の摘みの絵図面に思いがけず出合い、この寄縁に驚いた。また柳先生が私の所持する竹の炉縁に感心され、青木さんに実物を見せて作らせたことがあった。その材料探しに青木さんが苦労されたという。その白竹も半世紀以上たって薄い飴に近い、いい時代色になっていた。

(元日本民藝館員・茶道家)

ケリ

三浦 正宏

北東北の言葉には、思いもよらない奇妙な発音がある。その多くは東北固有の方言であり、あるいは古い日本語のなまりなどが、語源のはっきりしないものも少なくない。さらにはアイヌ語がひそんでいる場合もある。北東北の先住民、蝦夷（えみし）と呼ばれた民族から引き継いだ言葉である。

秋田には、晴れた日に履く靴を「長ケリ」、雨の日に履く長靴を「短ケリ」と呼ぶ地域がある。短と長は日本語ではあるが、「ケリ」は「靴」を意味するまぎれもないアイヌ語であり、いまもわたしたちの暮らしのなかに生きている言葉である。

そのむかしアイヌの人たちは、チエプ（鮭）の皮で作ったチエプケリ（鮭皮靴）とユク（鹿）の皮で作ったユクケリ（鹿皮靴）を履いて暮らしていた。

民具研究者の宮本常一は「日本で最初に履かれた履き物は何か」という問いに、自著『はきものとのりもの』のなかで「日本で最初の履き物は、皮靴と

カンジキであろう。縄文時代は狩猟と漁労が主な生活手段であり、夏は裸足でも暮らせるが、積雪寒冷の地帯では冬は履き物を必要としたと思われる」と書いている。積雪寒冷地といえれば北東北と北海道のことであり、その先住民はアイヌである。アイヌの「ケリ」は縄文時代につながる遥かなる「皮靴」なのである。また、和人と呼ばれたわたしたちの祖先が北東北に移住を始めたのは鎌倉時代といわれるが、「ケリ」というアイヌ語もわたしたちの祖先がそのころの先住民から聞き覚えた言葉だとすれば、七百年以上も使いつづけてきたことになる。

イタヤ箕の産地、秋田市太平にも「靴」を意味する「ケリ」という言葉が残っている。

ある日その秋田市太平で、自分も

「靴」を「ケリ」と呼ぶという方から、箕売りの行商と履物にまつわる話をきいたことがある。

太平箕作りの兄弟が、箕の行商で青森県木造村にさしかかったときのこと。弟が村はずれの靴屋で短ケリを買った。新しい短ケリを履いて揚々と歩きだした弟ではあったが、兄に「箕売りは地下足袋でなければだめだ」とたしなめられ、しぶしぶ村はずれまで引き返して買ったばかりの短ケリを靴屋にもどしたというのである。楽しくて興味深い話である。

アイヌの「ケリ」は足首からくるぶしにかけて包む込むような作りで「地下足袋」と同形である。アイヌの狩猟と箕売りの行商はどこか似た行為に思える。ケリと地下足袋は無関係であろう。しかし、箕作りの里とアイヌ語には何か関係があるように思える。箕作りの道具「マキリ」もアイヌ語で「小刀」のことである。

（いわな文芸会会員・秋田市）

小林多喜二の『蟹工船』

初版本のこと(一)

「蟹工船」を書き終えたのはその年三月で、全日本無産者芸術連盟(ナツブ)の機関誌「戦旗」五・六月号に発表し、前年に書いた「一九二八年三月十五日」を併録して戦旗社から出版されたのであった。そして即日発売禁止となった。

大正時代の半ば頃、第一次世界大戦の終結をうけて世界では民族自立の動きが活発化する。日本でも折からの不況と、ロシア革命の影響などにより労働運動が盛んになり、一九二八年二月には普通選挙法による初めての衆議院選挙が行われた。だが他方でこれら大衆的な政治・労働運動にたいする制圧は国内でも着々と準備されていた。

その年の三月十五日、共産党をはじめ左翼的と思われる諸団体に対する全国的な捜査と検挙が一齐に行われ、各地で数千人の労働者、知識人が逮捕されたという。多喜二の住んだ小樽でも

労働組合などが解散させられ、五百人以上の組合員などが検挙された。

「一九二八年三月十五日」と題する作品は、この事件の実録として書かれた。そして多喜二は「蟹工船」初版本併録のその作品の最終頁に、なんと「共産党万歳!三月十五日を銘記せよ、田中反动内閣打倒、労働農民党万歳(一部省略)…」と連記したのである。田中とは政党内閣を倒して首相になった、かの悪名高い田中義一陸軍大将である。

さて、いま記した話は一般には余り知られていない。「蟹工船」は多喜二の存命中は、巻末作品の全文削除版も含めすべて発売禁止となった。多喜二は一九三三年二月二十日、赤坂で逮捕され、その日の午後、築地署において拷問により絶命した。

「蟹工船」初版本を手にして友はさげなく言った。「この初版本は小樽の多喜二の文学館にもないと思うよ。いずれ寄贈するつもりなんだ」。

(志賀直邦)

あとがき

カナダ・バンクーバーの冬季オリンピックも終わり、幼少時から鍛えあげられた若者たちのさまざまなドラマも紹介され、感動を与えた。

ところで本誌39号で、千葉県木更津の里山保育を記録した映画「里山っ子たち」を紹介したが、先日、その統編第三作となる「里山の学校」を観た。これは毎土曜日に里山で開かれ、小学校低学年から六年生まで、男女を問わず、カリキュラムもない。モノづくりや遊びや自然観察の中で、体験を通じて生長していく子供たちの話である。

喧嘩、いじめ、思いやり、協力、仲直り、発見など、その全てに子供たちのハツとする、心打たれる成長が映し出されている。(桜映画社製作) (S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八・四一・二

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三・三五七・一一二〇一七

FAX 〇三・三五七・一一二一六九

振替 〇〇一・〇一〇・二一三五六五九

定価 六〇円(税込)